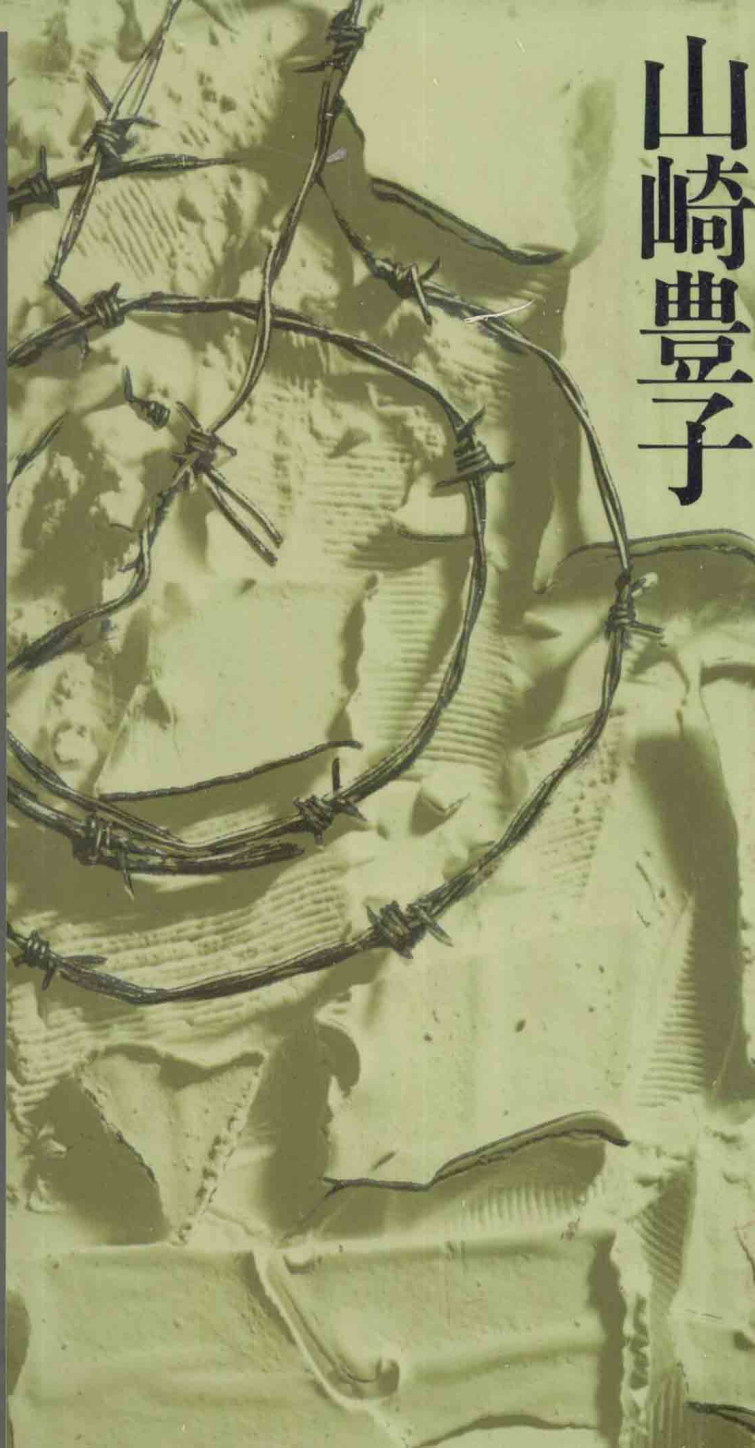


山崎豊子

二つの祖国

中



新潮社版

崎豊子

一つの祖国
中



ふた
二つの祖国

昭和五十八年八月二十日 発行
昭和五十八年十月十五日 五刷

定価 一二〇〇円

著 者 山崎 豊子

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七二

電話(業務部)〇三二六六五一一

(編集部)〇三二六六五四一一

振替 東京 四一八〇八番

製本 加藤製本 株式会社

印刷 大日本印刷 株式会社

© 1983 Toyoko Yamasaki Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-322811-3 C0093

二つの祖国(中)・目次

一章	二つの戦場……………	7
二章	兄と弟……………	59
三章	ニッポン……………	127
四章	モニター……………	172

五章

ファミリー……

213

六章

証

人……

239

七章

パール・ハーバー I ……

291

裝
幀

司

修

二つの祖国 (中)

太平洋戦争は、数多くの哀しみと愛のドラマを生んだ。この作品は、当時の歴史的事実をもとに、小説的に構成したものである。登場する作中の主人公とその家族、友人などは架空の人物である。

一章 二つの戦場

乱気流で荒れる南支那海を、日本の輸送船団がフィリピンに向って航行していた。

鉛色の空に風が咆哮し、波濤がおしよせるたびに、輸送船は木の葉のように揺れながら、空からの米軍の艦載機、海からの潜水艦の襲撃を恐れ、島陰を伝うように進んでいた。

船団はいよいよ魔のバシー海峡にさしかかった。

天羽忠は、兄の賢治が米軍情報部に所属し、自分たちの旭兵団（第二十三師団）が北満から、フィリピンへ向う大本営命令書を解読したことなど知るはずもなく、船倉にいた。

四千人余りの兵隊がいつでも退避できるように完全装備でぎっしり詰め込まれ、息を殺している。先行した船団の艦船はバシー海峡で殆んど撃沈されているのだった。

輸送船の通信一切が封じられ、鼠の走る音だけが聞える息詰るような沈黙であった。米軍の餌食になるかもしれない恐怖が誰の眼にも滲んでいる。

陸軍上等兵、天羽忠も身長百七十五センチの脚の長い日本人離れした体軀を屈め、ぎょろりとした眼を瞬きもせず、神経を研ぎすましていた。

極度の緊張と恐怖の中で、忠は、自分のズボンの外側が、生温いもので濡れていることに気付いた。身動きも出来ぬほどぎっしり詰め込まれている右隣りを見ると、二十一歳になったばかりの小浜二等兵が、憐れみを乞うように顔を歪めている。初年兵訓練も終わっていない新兵は、恐怖のあまり失禁したようであった。忠は、ふと同じ齡頃の弟の勇のことを思い浮かべ、軽く頷き、何事もなかったような顔をしてやった。

伝令が来、バシー海峡無事通過を報せた。船倉にぽつとした吐息が流れ、緊張が解けた。忠は用便のために、船倉から甲板へ這い上った。各班が交互に体操をする時と用便以外には、甲板へ出ることを禁じられていたが、忠は用便をすませたあと、すぐに船倉に戻らず、起重機の陰で長い脚を投げ出して、新鮮な空気を吸った。

船が南下するにつれ、海は鎮まり、緑したたる島々が見えると、カリフォルニアにいる両親と兄弟妹たちのことが思われた。日米交戦下のアメリカで、日系人の父たちはどのような暮しをしているのだろうか、開戦前の排日感情の強さを思うにつけ、身の上が案じられ、二十三歳の忠の胸にこみ上げて来るものがあった。

「おい、何をしているのだ！」

頭の上で声がした。仰向くと、古参軍曹の鬼頭であつた。その名の如く、兵隊たちから鬼軍曹と怖れられ、特に二世の忠に対しては、絶えず、執拗な猜疑の眼を向けていた。

忠は、瞬間的にたち上り、直立不動の姿勢をとつた。

「軍曹殿、天羽上等兵はトイレット……、いや、厠にやらせて戴きました」

軍隊用語で答えた。

「トイレ……？ 厠へ行くというのを英語では、どう云うのかね」

いやがらせの口調で聞いた。答えずにいとると、

「おい、この俺には教えられんと云うのか」

「忘れたのであります」

「なに、忘れた？ お前の頭は都合よく出来とるじゃないか」

せせら笑うように云い、

「貴様、用便がすんだら、なぜすぐ船倉に戻らんのか、何かに隠れて、こっそりやらねばならんことでもあるのか」

疑い深い眼つきをした。

「いえ、船酔いをし、吐きそうなので、少し風にあたっていたのであります」

「ふむ、風か、海の向うのアメリカ風にあたりたいのだろう、この野郎！ たるんどるぞオ！」

と云うなり、びんたが飛んだ。不意をくらって、忠はぐ

らりとよろめき、危うく海中に転落しかけた。足を踏んばり、直立すると、さらに両頬にびんたが連打され、眼から火が出た。

「解つたか、これで！」

「はい、軍曹殿、お世話になりました」唇の端が切れ、ぬるりとした血が滴るのを手の甲で拭い、

忠は急いで船倉へ降りて行つた。

すし詰めの船倉の中で、ようやく体を横たえたと、入隊以来の三年間がまざまざと思い出された。

昭和十六年二月、徴集を受けて、原籍地の鹿兒島歩兵第四十五連隊に入隊し、一カ月後には、北満の地、ハイラルへ送られ、第二十三師団歩兵第七十一連隊に配属された。

ハイラルは冬になると、零下五十度にまで下り、夏は四十度の暑熱で、馬も人も炎暑に喘ぎ、十六歳まで年中、温暖なカリフォルニアに育つた忠にとっては、あまりに厳しい気象条件であつた。その上、軍人勅諭の読み方が悪いといつては殴られ、天皇陛下から戴いた銃の取扱いが悪いといつては蹴られ、その他、理屈に合わぬ理屈で殴られる初年兵教育は、忠には惨忍なりンチに思われた。なぜこんなリソチのような行為が、初年兵教育として罷り通るのか、忠はしばしば理解に苦しんだ。だが、日本の軍隊に入つたからには、耐えるしか生きる道はないのだと覚悟を決め、びんた教育という日本軍独特のやり方の中で、忠も一人前の兵隊に鍛え上げられたのだった。

しかし、その間、忠の心を鋭く抉つたのは、幹部候補生試験であつた。大学卒業者は、幹部候補生試験に合格すれば、少尉に任官出来るが、それには、大学の配属将校による軍事教練の全科目を終了、合格したという証明書を必要とした。忠は人一倍、軍事教練に励んだにもかかわらず、配属将校の証明書を得られず、受験が許されなかつた。それが、アメリカ生れの二世であるという偏見に起因していることを知つた時のショックは大きかつた。

アメリカのハイスクールで、生徒会長に選ばれながら、白人の父兄たちの猛反対を受けて、ついになれず、それなら、ジャップと差別されることのない日本へ行くことを決意したのだつた。その日本で、二世だからという理由で、差別を受けたのだつた。その日以来、気性の激しい忠は、二世ということで差別されることに挑戦するように我武者羅に努力した。その結果、ようやく一つ星の二等兵から、三つ星の上等兵まで進級したのだつた。

「天羽上等兵殿、飯あげの時間であります」

二等兵の飯あげ当番が、にぎり飯とみそ汁の屋食が出来たことを報せに来た時、対潜警報が鳴り響いた。寸秒おかず、大音響がし、激しい震動と同時に、体が宙に浮いた。その瞬間、忠は敵潜水艦の魚雷を受けたと直感した。

「全員退避せよ！」

緊急退避命令が出た。忽ち船体が傾きはじめ、兵隊たちは争つて狭い階段にひしめいた。

忠はようやく、甲板に這い上ると、兵隊たちが甲板に繋いである救命艇に殺到していた。

「慌てるな！ 慌てるな！」

鬼頭軍曹が大声で怒鳴り、銃床で兵隊たちを押し返し、将校と一緒にいち早く、救命艇に乗り移つた。兵隊たちも甲板の救命艇を下し、乗り移ろうとした時、後部船腹でまた魚雷が炸裂した。積載弾薬に引火し火柱が空高く噴き上り、後部甲板にいた何十人も人間が宙に吹き上げられ、ロープを切られた艇は海になだれ落ちた。忠は、船の傾く方向と反対側へ廻り、船腹から海に飛び込んだ。反対側に飛び込まないと、船の沈没時に、海中へ吸い込まれてしまう。

五、六十メートル、船体から離れた時、赤い船底を見せて、海中へ没して行くのが見えた。魚雷命中から五、六分であろうか。海上に黒い重油が拡がり、油層の臭気とガスの臭いがたち籠め、生きた人間、死んだ人間が入り混つて、何百人となく、波間に浮かんでいる。

忠は完全武装で、救命胴衣をつけていたが、中にはバシ―海峡を通過すると、船倉の蒸し暑さに装備を解き、着のみ着のままの者もいる。門司から乗船した補充兵たちは、代替品の孟宗竹をつなぎ合せて救命胴衣をつけていた。

「上等兵殿、助かるのでありませんか」

恐怖のあまり失禁した小浜二等兵が、忠の近くで手をばたつかせながら聞いた。

「大丈夫だ、泳ごうとするな、じつと浮かんでおれば、海防艦が救助に来てくれる」

ちょうど忠の前に流れて来た船の木片を小浜の方に押しやると、数人の兵隊が奪い合った。救命胴衣をつけていない者は、つけている者に縋ろうとし、縋りつかれては自分が沈んでしまうから、

「掴まるな！ 離せ！」

相手の手を叩いたり、体を蹴って逃げ、離れる。そうしながらも潮の流れで、木屑が一处に集るように、何百人もが集って、波間に漂っていると、海防艦がやって来た。

舷からすると、縄梯子が三、四本、下ろされると、兵隊たちは、先を争って、しがみついた。一人が縄梯子にしがみつくとき、その足に一人が縋りつき、さらに三人、四人と数珠つなぎにぶら下り、誰も艦へ上れない。艦上から

「おい、時間がないぞ！ 一人ずつ、早く上って来い！」

大声で怒鳴り、何度も縄梯子を引き上げにかかったが、重過ぎて上らない。忠は、縄梯子を諦め、船腹に手がかりを探し爪をたてたが、つるつる滑るだけであった。

再び縄梯子に縋ろうとした時、ぶつんと縄が切れ、悲鳴と共に何人かが海に沈んだ。

海防艦が救助を打ちきり、動き出すと、最後の力を振り搾って、船に追い縋ろうとした数名がスクリューに巻き込まれ、海中に没した。

天羽忠は、救助の船に見捨てられ、煮えくり返るような

憤りと絶望に襲われた。救助艦自体が、いつ敵潜水艦に襲われるかしない危険に曝され、救助時間が僅かであるとはいえ、一人も救助出来ずにたち去るとは、あまりに非情であり過ぎる。そこそこに泣き叫ぶ声や、ちくしょう！ 人非人！ と罵り呪う声が上がった。

不意に忠の近くで、げらげらと笑い出す声がし、見ると、小浜二等兵であった。海に投げ出されたショックで、遂に発狂してしまったようだ。小浜は、重油にまみれた体で木片に縋りつき、波間に浮かびながら大口を開けて、げらげらと笑っている。

「おい、しっかりしろ、他の救助艦が必ずやって来るぞお」

大声で励ますと、突然、

「雨、雨、雨、降れ、降れ、母さんが……」

童謡を唄い出した。初年兵とはいえ、二十一歳の男が唄う歌にしては異様すぎ、「ビッチ、ビッチ、チャップ、チャップ、ランランラン」と咽喉も張り裂けんばかりに唄い狂っている。

発狂した彼の胸の中にあるのは、幼き日の母の姿であり、母を恋うる歌であることが、痛ましかった。

歌声が止んだかと思うと、

「上等兵殿！ 救助艦が来とります、助けに来とつとです

よ！」

小浜は歓声を上げたが、重油がぎらぎら光る南洋の真昼の海面には、豆粒ほどの船影も見えない。

「小浜、船はまだだ、もう少し頑張れ！」

幻覚を打ち消すように云うと、

「上等兵殿、船が見えるじゃないですか、近付いて来とります、早く行かんとまた行つてしまいますばい」

と云うなり、縋っている木片を離し、泳ぎかけた。

「止めろ！ 泳いでは駄目だ、船が来るまで待つのだ！」

忠は、小浜の傍へ寄り、腕をとりかけたが、驚くほど強い力で振り解き、水しぶきをたててみるみる五メートル、十メートルと離れて行つた。忠は後を追つたが、距離は隔たるばかりであつた。

突然、小浜の泳ぎが止まり、

「おっ母さん！」

と叫んだかと思うと、ぼこぼこと沈んでしまつた。

ついさっきまで小浜が縋りついていた木片が、忠の前に流れて来た。油で黒光りした木片には、小浜の腕のあとが残っていた。

暫し茫然とし、波のうねりに身を任せ、浮き沈みして

たが、その間にも一人、また一人と海中に没して行き、沈んで行つた人間が手放した木片だけが、波間に揺れている。忠はその中で船の甲板に使つていたらしいしっかりした大きな木片を、ゲートルで背中にくりつけた。腰にぶら下

げていた雑囊も、銃剣も体力の消耗を防ぐために、とうに捨てていた。時々、小さな島影が見え、泳ぎに自信のある者は、その島影に向つて泳ぎ出したが、忠は潮の流れの中に浮かんでいた。

夕闇が迫る頃には、忠の周りには十数人がいるだけだつた。やがて日が昏れると、近くに漂う人の姿は見えず、闇の中で波が次第に高くなつて来た。山のような波の頂きから谷間に叩き落される時は、そのまま海底へ吸い込まれそうな恐怖を覚える。熱帯の海とはいえ、海難後七、八時間ほどたち、寒気が身に滲みて五体が震えた。

長い恐怖の夜が明けると、忠の近くにはもう誰もいなかった。激しい睡魔が襲つて来、体が冷えきり、放尿する時だけ、かすかな生温かさが腿に伝わる。眠つては駄目だと思いつつも、いつの間にかまどろみ、儼に元氣な両親や兄妹の姿が現われた。

「忠、学校に行つ前いブラウンさんところい、ワイシャツ半ダースとソックス十ペア、そいにミセスンドレス二着、配達してくれ」

父が洗濯ものの配達を云いつけた。

「ブラウンさんのところは忠のハイスクールから遠い、急がないなら僕が行つてもいいよ」

兄の賢治の声。

「あら、忠兄さんはフットボールの選手だから、いいトレ

「ニングになるじゃないの」

妹の春子の生意気盛りの顔。その声にかぶさるように、
「賢治でも忠でもいいけど、ミセスンドレスのアイロンは、きれいに仕上げつあるつで、皺しわいならんごつ気をつけんね」

と母が注意した。

波をかぶる度に、母の声が聞え、その声で眼が覚めた。

まどろんでは覚め、覚めてはまどろみ、どれほど経った頃だろうか、飛行機の音で意識を取り戻した。眩くらしくて太陽から眼をそらせた途端、船の姿が見え、次第に近付いて来るのが解った。敵艦ならどうしようという不安が掠さらめたが、英語が通じるという気持のせい、たとい敵の船でも助け上げられたいと願った。やがて船は飛行機と発光信号で連絡を取りはじめた。どこからともなく木片に取り縋つかった七、八人が泳ぎ寄って来た。

やと救助艦が来、忠の頭上近くにロープを下した。今度はそれに縋りつく者は、僅かな人数であつたから、一人ずつ順序よく擱おつた。甲板に引上げられると、そのままずうと、眼を閉じて眠りそうになつた。

「しつかりしろ！ 眠るな！」

両頬にビンタがとび、我に帰つたが、体は動かない。朦朧もうろうとした意識の中で、二人の水兵が重油だらけの着衣を脱がせ、忠の体をドラム缶のガソリンの中へ浸ひけて、油を洗

い落し、毛布にくるんで、熱いお茶と乾パンを手渡してくれた。その瞬間、胃が痛むような激しい空腹感を覚えたが、重油で咽喉が灼け、食べられなかった。

「おい、お前、助かつたんだぞ！ 運がよかつたな」

水兵たちが肩を叩いたが、忠は助かつた喜びや感動は不思議に湧かず、漂流中のショックが大きすぎたせい、夢遊病者のように呆然としていた。そして十日後まで黒い重油の便が出た。

「ケーン、メルボルンから今、帰つたよ」

チャーリー田宮の声に、天羽賢治は眼が覚めた。何の夢を見ていたのか、全身ぐつしより汗をかき、胸苦しさが残っていた。

「なんだ、眠っていたのか、灯りがついていたので、起きていると思つたんだよ」

チャーリーは、向いの藤椅子とうきしにどかつと坐つた。

「悪い夢を見ていたようだな、何か心配事でもあるのかい？」

「いや、別に——、今、何時だい」

軍服のズボンをつけたまま上半身、裸でベッドに横になり、いつしか眠り込んでいたのだつた。

「まだ九時過ぎだ、街にも出ず、こんな宿舎のベッドにば

かり寝ていては、心身ともによくないぜ」

メルボルン出張で、適当に遊んで来たらしいチャーリーは、にんまり笑ったが、賢治は、

「もしかして、弟の夢を見ていたのかもしれない、助けを求めていたから、助けに行こうとしたんだが、声ばかりで姿が見えないんだ——」

「それはイタリイ戦線で、名譽の戦死をした四四二部隊のイサムことかい、それとも日本軍にいますとかいうタダシのことかい」

そう聞かれ、返答に詰った。ヘルプ・ミー、ヘルプ・ミーと闇の中から助けを求めていたのは、勇（いさむ）のようでもあり、忠（しゅう）のようでもあった。黙り込んだ賢治に、チャーリーは、

「それはそうと、君はインドロピリーのA.T.I.S（連合軍翻訳通訳部）で、日本の二十三師団の輸送船団から流出した

捕獲文書を翻訳したそうだな、船団の規模まで解明したらしいが、偶然、俺もメルボルンで二十三師団、旭兵団の動きについて、興味津々（しんしん）の話を聞いたんだ、二十三師団の輸送船団が攻撃されたのは、米軍が事前にその動静を察知していたからだということだ」

と云った。

「どうしてだ、それ？」

「大本営から南方総軍司令部に向けた命令書の一部が、マニラ市内でフィリピン人の諜報部員（ちほうぶ員）によって盗まれたんだ」

「まさか、大本営命令書が盗まれるなど、考えられない、あまりにもお手軽すぎる話じゃないか」

「それが現実（じじつ）に起ったらしいぜ、つまり、大本営から南方総軍司令部に発せられた命令書は、さらに司令部の各首脳に伝達（でんた）されるが、日本軍は情報の扱い方に疎（そ）いんだろうな、関係のない獣医部へまで廻るそうだ、その獣医部の某大尉が、命令書の入った軍用カバンを持って、当番兵の運転する車でマニラ市内へ行き、二人がちよっと車から離れた隙に、カバンごと盗まれ、大尉は即刻、二等兵に降等という事件があったそうだ、命令書は直ちにワシントンの国防省へ送られ、釜山（釜山）にいる米国側の諜報員は、二十三師団がハラルから釜山に下り、釜山からレイテへ向って出港する動きを、ぴしっとマークしていたという次第さ」

チャーリーは、情報通をひけらかすように得々と話した。「じゃあ、二十三師団は、どこで攻撃されたんだ、全滅か」

賢治は、体が硬（こわ）まるのを感じた。

「そこまで詳しいことは知らないよ、だが、釜山からの情報では、二十三師団は、三つの輸送船団を組み、日本の門司（もんし）経由でレイテ島に向うということだったらしいから、五島列島のあたりで、待ち伏せをくったのは想像に難くないな」

「では、あの捕獲文書は、九州沖で沈められた船団だったのか——」

賢治は、夢の中の声が、俄かに忠であつたように思えた。

「まあ、そうシリアスに考えるな、その船でタダシが死んだとは限らない、三船団に分れておれば、全滅ということはないじゃないか、それにあのタダシは、君やイサムより、気が強くて、腕っ節がたつから心配ないよ、うまく助かつて、今頃は日本の原隊に戻っているだろうよ」

と云うなり、さつと部屋を出かかり、

「そうだ、これ、郵便受けに入っていたよ、俺もナギコと離婚しなかったら、こうやって便りが来るのに、わびしいよ」

羨しように云い、シャワーを浴びに行った。それは、妻のエミーからの手紙だつた。

私のダーリン

オーストラリアの生活はその後、いかが？ チャーリーと一緒にの宿舎というのはどうも気になります。あの人は独身になったのをいいことにして、妙な遊びをあなたにすすめかねないからです。

そちらは夏ということですが、ミネアポリスは雪が一メートル近く積もり、厳しい冬に向いつつあります。

アーサーがまた気管支炎で熱を出し、シグ木村がスノー・チェーンを巻いた車で深夜、ドクターのところへ運んでくれました。そんな時、ベティが幼いので、家へおいて行くことが出来ず、泣きたい気持ちです。幸い

アーサーの熱はおさまりましたが、ミネアポリスの辺鄙な郊外で、女子供だけの生活は心細い限りです。

この間のお手紙で、あなたは反対だと云われましたが、二人の子供のために、やはり実家の父のもとへ行きたいと思います。父はいち早く、マンザナル収容所を出しました。リトル・トーキョーへ戻るのはまだ危険なので、クレンシヨアの近くにボーディング・ハウス

(長期滞在者用簡易ホテル)を買い、商売をはじめる準備をしています。昨日も手紙が来て、二歳と一歳の子供を抱えて女一人では大へんだらうから、出ておいでと云ってくれました。年を越すと、雪が深くなって動けなくなるので、今年中に暖かいカリフォルニアへ移りたいと思います。どうか早くOKして下さい。

愛をこめて、あなたのエミーより

名前のところに、紅いルージュが捺されていた。

賢治は、執拗にミネアポリスを出たがっている妻の我儘に腹がたつた。アーサーの発熱は心配であつたが、キャンブ・サベージから戦地へ出ている教官は賢治だけではなく、他の教官の妻たちは、互いに助け合つて、留守を守り、子供を育てているというのに、頻りにミネアポリスを出たがるのは、雪に閉ざされる退屈な生活に我慢出来ないからに違いない。夫が、戦地で何を思い、どのような日々を送っているのかなど、一顧だにせず、自分の我儘だけを一方的